

日本におけるムスリム女性の妊娠・出産体験と周産期ケアニーズ

国際看護学専攻 修士論文コース 田村千亜希

【目的】 日本におけるムスリム女性への周産期ケアニーズを考察することを目的とし、日本の文化と異なるイスラームという宗教を持ちながら、妊娠・出産したムスリム女性の体験を記述する。

【方法】 半構造的面接法による質的記述的研究である。東京近郊に住むムスリム女性7名を対象に日本での妊娠・出産体験について半構造的面接を行った。データ収集期間は2011年7月下旬から9月であり、得られたデータは帰納的カテゴリー化を行った。

【結果】 日本におけるムスリム女性の妊娠・出産体験は、妊娠期から産褥期を通して12のカテゴリーと38サブカテゴリーに分類された。ムスリム女性にとって**【妊娠したことへの思い】**は「子どもが生まれるのはイスラーム」のためであり、子どもはアッラーからの授かりでムスリム女性は元気な子どもを生き育てる使命を担っていた。ムスリム女性を支える**【夫の役割】**は、「相談できる相手がなくて寂しい」時には身近な相談者となっていた。分娩立ち会いの時にはムスリム女性に代わり「アッラーとの仲介者」となり、クルアーン（イスラームの経典）を読みドゥア（祈願）を行っていた。児の出生時には「出生儀礼の実施者」となり、産褥期には**【家族からの援助】**が受けられないムスリム女性を支え、積極的な「夫の家事育児参加」が語られた。出産時の**【助産師との関わり】**の中で助産師は「出産時の不安な気持ちを軽減してくれる」存在であり、ムスリム女性は「すべてを受け入れてもらっている感じ」ととらえ、助産師に信頼を寄せていた。**【母国との医療体制の比較】**から、日本の医療水準は高く「保健指導が充実している」が「出産費用が高い」と感じていた。妊娠・出産時に関わる**【イスラームの教義の実施】**は入院中「ハラールフード（イスラームで許容された食品）が食べたい」「男性からの視線を避けたい」「女性スタッフのみで対応して欲しい」「礼拝を行いたい」とムスリム女性は望んでいた。ムスリム女性の妊娠・出産体験から導きだされた周産期ケアニーズは、アッラーから授かった生命を守るため安全に出産できること、アッラーからのご加護を得て無事に出産するためにイスラームの教義を実施できること、医療従事者のイスラームに対する個人的な感情を取り除き受け入れられること、母国の家族から援助が受けられないため産後の支援が受けられること、夫役割が遂行できること、男児出生の際には割礼が行えることであった。**【結論】** ムスリム女性にとって妊娠することはアッラーから授かった生命を無事に産み育てることであり、イスラームの教義を实践することはムスリム女性にとって無事に出産をするためであった。夫は妻を支える役割を担い、分娩進行中は妻に代わりアッラーとの仲介者となっていた。医療者はムスリム女性のありのままを受け入れることが必要である。

コメントの追加 [TC1]: 出産後どれくらいの期間の人までを対象とするのか、対象選定基準を明確に記載する。

コメントの追加 [TC2]: なぜ8名なのか、8名で十分なのかに関する説明を記載する。